



発掘調査の概要

檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原第184次）

檜隈寺周辺の調査は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備にともない、奈良文化財研究所が国土交通省の委託を受けて2008年度から実施しています。今回の調査区は檜隈寺中心伽藍の南東にあたる丘陵斜面部に設定しました。この調査区は、2013年度調査区（第180次調査）の南にあたります。

第180次調査では、この丘陵斜面部において古代から中世と推定される建物、塀が発見されています。今回の調査はそれらの建物、塀の広がりを確認し、古代から中世にかけての檜隈寺の実態を知る手がかりを得ることを目的としました。調査期間は2015年2月2日から3月27日までで、調査面積は377㎡です。

調査の結果、斜面頂部および下段部においては、中世と推定される掘立柱建物を3棟検出し、斜面中段部においては、古代と推定される掘立柱建物を2棟と掘立柱塀を1条検出しました。これにより、檜隈寺伽藍南側では主に古代と中世初頭の二時期に建物等が建立されたという第180次調査での見解を追認するとともに、関連する遺構がさらに伽藍南方へ展開することがあきらかとなりました。

調査区中段部では、中世の包含層を除去した褐色粘質土面および地山面で古代と推定される掘立柱建物を2棟と掘立柱塀を1条検出しました。これら

の建物および塀の方位は、檜隈寺伽藍の造営方位におおむね一致しています。中段部北端で検出した掘立柱建物は南北、東西とも2間であることが確定しました。中段部南端で検出した掘立柱建物は南北2間以上、東西2間で調査区の南方へ続いていきます。掘立柱塀は第180次調査で検出した塀と一連であることが判明し、西へ折れ曲がることを確認しました。ただし、西に続く柱列の遺構は、後世の削平を受けており検出できませんでした。

調査区頂部では、小型の柱穴を6基検出しました。柱穴は7尺（約2.1m）の等間隔で並び、第180次調査で検出した掘立柱建物と一連であることが判明しました。これによりこの建物は南北5間、東西2間であることが確定しました。柱穴の埋土には瓦器が含まれることから中世の建物だと考えられます。

調査区下段部では、小型の柱穴からなる掘立柱建物を2棟検出しました。それぞれ、第180次調査で検出した掘立柱建物と一連であり、南北4間以上、東西3間以上の建物と南北4間、東西2間以上の建物であることが判明しました。第180次調査の成果より建物の時期は中世以降と推定します。

以上のように、檜隈寺伽藍の南側では、丘陵の頂部、中段部、下段部で時期の異なる遺構が確認でき、中心伽藍の南方における古代から中世にかけての土地利用状況の一端を知ることができました。

（都城発掘調査部 前川 歩）



調査区全景（東から）



斜面中段部掘立柱建物、掘立柱塀（北から）